



# 五月雨



伽藍

世界は美しい。

そんなふざけた事を思えるようになったのは、果たしていつからだっただろうか。

視線の先は、灰色だ。灰色の街、灰色の人、灰色の空。

空からは雨が降っている。灰色の空から断続的に降る、――そう、あれは五月雨といったか。

思い出しながら、僕は自分の手元に視線を落とす。

手元には、一通の手紙があった。いつかの誰かが書いた、未来への手紙。そんな、夢物語に似たものを持ちながら、僕はただ佇んでいる。

すぐ近くから、子供達の声が聞こえる。生憎僕の眺めている窓は校庭には面していなかったから、彼等の姿が見える事は無いのだけれども。

この雨の中でも、元気な事だ。

そう思って、僕はふっと笑った。思い付いて、鼻から息を吸い込んでみる。

ここ数日ですっかり馴染んだ匂いが、鼻孔を擦った。

湿った土。

腐った錆。

子供の頃は不思議で堪らなかった特徴的な雨の匂いが、空気中に微量に混ざる酸の匂いであると、既に自分は知っている。

僕は、雨が好きだった。

世界は美しい。

降り頻る雨は、それを損なうものでは決してなかったからだ。

雨は空気中の淀みを浚って、地面の泥と一緒に流れるだろう。雨が上がった後の清涼な空気も、心地良くて好きだった。

手の中にあった手紙を、気紛れに開いてみる。かつての自分の拙過ぎる筆跡に、こっそりと苦笑した。

母校であり、現在の勤務先でもあるこの小学校で、偶々見付けたものだった。誰かと示し合わせた訳でも、学校の行事などでもなく、最早記憶が霞む程の昔に、一人でこっそりと隠した誰かへの手紙。

雨は好きだ。

生あるものが、雨に打たれる様は美しい。

だから同時に、眼の前の光景が少しだけ残念でもあった。灰色の街、灰色の人、灰色の空。

命の気配など、どこにも無かったから。

「せんせい――」

呼ばれて、僕は振り返った。さようなら、という低学年に特有のゆっくりとした挨拶に、自分も同じテンポでさようならと返ししながら、そっと微笑む。

「それ、どうしたの？」

「どうしたんですかぁ？」

「おなかいたい？」

目上の人間に対しての言葉遣いを諫めるべきか悩みながら、僕は子供達に手紙を広げて見せた。

「おてがみ？」

「そう——」

鉛筆で書かれた文字を指でなぞる。何一つ知らなかった、知らずにいられたあの頃、成る程、確かに自分は幸せだったのだ。

「だれからあ？」

「……さて、ね。さあ、もう帰りなさい」

「はあい」

「さようならあ」

「さようなら」

それは、手紙だった。いつからの誰かからの、いつかの誰かに向けての手紙。

『がっこうのせんせいになって、ここでみんなと——』

叶った夢がある。

勿論、叶わなかった夢も。

新しい世界に、そうと知らずに踏み込んできた子供達。彼等は何を思うのだろうか。何を、夢に見るのだろうか。

そして、これから踏み込んでいく、どこかの誰かは。

雨は降るだろう。子供達の不安も期待も困惑も希望もそれから未来も、全て全て何もかもを飲み込んで、只管に。

そうしていつか、虹が架かるだろう。

灰色の世界なぞ、知らぬとでも言いたげに。

僕の手の中には手紙がある。いつか手放した夢の欠片。

このちっぽけな掌に収まる、いつかの誰かが、いつかの誰かへと託した想いが。

僕は昔のように笑った。それから手紙を折って、出来上がった紙飛行機を雨の中に飛ばした。